

〈共同研究報告〉

小特集「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」(二)

鈴木貞美

本誌第四〇集に続いて、共同研究報告「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」の小特集を組む。小特集といっても二本だが、佐藤一樹論文は、明治期において、日本人が「漢文」すなわち中国語文を書くことの意味が変容し、減少してゆく転換期の様相を、それをとりまく状況のなかで考察した貴重な論考である。

明治一〇年代半ばから若年知識層に、日本古典ブームに引きつづき、「漢学ブーム」が起こるが、それらのテキストは、古典の注釈書のかたちをとったものであり、いわば教養としての「漢学」であった。中学校以上の「国語」という教科のうちで行われた「漢文」教育（一八七二年学制）では、もう少しあと、日清戦争期に、「漢文」の授業時間数が増え、しかし、暗誦と作文が必須科目からはずされる。この論文に示された重野安繹の考えとほぼ同様の理由と推察してよいだろう。明治期中期以降の「漢学」のあり方、また「国語」教科における「漢文」学習の変化の解明にも資するものと思う。

もうひとつの鈴木貞美論文は、『日本研究』第三四集掲載のチャールズ・シロー・イノウエ論文「Figurality（形象性）と近代意識の発展」に触発され、また昨今、モダニズム文藝研究において映画の役割が強調される傾向に応じたもので、「ヴィジュアルティ」という概念と文芸史のシーンとを交叉させるところに生じる問題群と、その分析方法を論じたものである。

概念編成史の研究と文化の実際の様態とを関係づけることで、新たな研究の進展がはかれる実例を示す二本の論考として受け取っていただければ幸いである。